

私は銀行というものがあまり好きではない。こんなことを日本銀行の広報誌のエッセイの書き出しにしてしまった方がいいものかと思うが、事実なのだから仕方がない。なぜ好きではないかといえば、銀行内部に入るとほとんど必ずお腹が痛くなってしまうからだ。おそらくそれは私が極めて非経済的なタイプの人間なの原因であり、銀行が悪いのではなくこちら側の問題であることは間違いない。

非経済的な人間である自分が行っている経済行為はご多分に漏れず、競馬と株ということになる。競馬は馬券は買わなくなり、共同馬主として何百分の1の権利を買い取り賞金を分け合う形で楽しんでる。一時は持ち馬が七〇頭にまで膨れ上がり、名前を覚えるだけでも大変だった。株は要するに買や下がる、売りや上がるを三〇年近くも繰り返し返ってきて、最近はずべて放ったらかしにしている。

こんな非経済的な日々を送っていると、銀行の中に入った途端にまるで何か悪いことをしているような気分になって思わずそこそそとしてしまうのである。一月わずかの金利をしっかりと積み立てながら、精励せいれいに生きている人たちの前で、何だか申し訳ない気持ちで一杯になってしまうのだ。

私は銀行というものがあまり好きではない

大崎善生



絵・江口修平

私は持っている現金をすべて普通預金に預けている。親切な銀行の方が電話をくれて、それを定期にしておく一年にどのくらいお徳かと説明してくれる。その話を聞いているとどのくらい自分が駄目人間であるのかを数字をもって指摘されているような気持ちになり、思わず受話器を持ちながらうなだれてしまう。しかし定期は肌合わない。六カ月下ろせないと聞いただけで体が固くなってしまふのだ。勤め人時代の私はキャッシュカードを逆向きにしか使ったことがなかった。つまり赤字キャッシング生活を四〇歳近くまで続けていた。生まれてこの方借金などただの一度もしたことのない妻は、そんな私の姿が物凄く男らしく格好良く見えたというから分らないものである。いかに限度額内でやり繰りするかが勤め人時代の私の自慢であり腕の見せどころでもあった。

作家になり結婚し、がん保険に入られることになった。私はついでに保険も嫌いでそんなものにはまったく興味なかったのだが、営業マン氏の言う「がん保険に入った人は不思議とがんになりません」という分かったような分からないような言葉に妙に感動してしまったのである。

おおさき・よしお●1957年、札幌市の生まれ。2000年デビュー作『聖の青春』で第13回新潮学芸賞を、翌年『将棋の子』で第23回講談社ノンフィクション賞をそれぞれ受賞。02年には『パイロットフィッシュ』で第23回吉川英治文学新人賞を受賞する。最新刊『エンブティスト』『西の果てまで、シベリア鉄道で』ほか著書多数。

